

# 小域における新しい試み

——準農村におけるオピニオン・リーダーの開発とその改革(1)——

山 口 信 治

## はじめに

茲に発表する報告は滋賀県のほぼ中央に位置する巨大な貯水湖・琵琶湖の湖南地区M市の純農村を対象に、来るべき「人工長命社会」に対する啓蒙並びにその対処策エコシステムを実験的に試行しようとしたものである。

そもそもこのプロジェクト・チームのアプローチは「日本老残」の著者であり「人工長寿社会」への警告と、その対処策「media・中間施設」の研究者・吉田寿三郎（大阪医科大学教授）に加えて専門家並びに地元の有力者、ボランティアらを中心とする集団で構成し、昭和五十二年、厚生科学研究助成をはじめに、諸財団の援助を受けて今回までプロジェクト研究をつづけてきたものである。

以来、三ヶ年を経過しその基礎的な調査研究を終え、次年度になって新しい転換期を迎えることになった。即ち本プロジェクトの研究の目的は、「小域」つまり五万ないし十万程度の人口をもつ地域社会を設定しこれを（学区）に求め老令者の生活ニーズの充足に寄与するための場「センター」機能の実現を住民の運動（参加）により

実現化しようとするものである。そこで初期のアプローチは専ら地元との接触を通じて、この「人工長命社会」の担い手、オピニオン・リーダーに住民参加の仮説をおいて、専らその「人工長命社会」とは何か？ の教宣に努め、この二十一世紀の危機を担う革改者 (innovator) とそのヒューマン・インフルエンスの役割を担うオピニオン・リーダー (opinion leader) の発掘においた。

さらに本プロジェクトはM市 (人口四万・昭和五十年調べ) よりモデル対象地区・対照的な二地区 (二学区) を選んだ。一つは国鉄M駅を中心とする旧市街地地区・Y地区 (学区)、さらには琵琶湖に面する純農村地区よりH地区 (学区) である。前者は人口八六〇〇人 (昭和五十年) をかかえる比較的都市化された社会構造をもつ市街地地区と後者のH地区は人口五千二百人。市街地地区と隣接するも、田園を中心とするグリーンベルトで仕切られ主たる産業を農業とする純農村地区を選んだ。しかも今回はコントロール・グループとしてH地区を代表する、つまりモデル地区としてO部落を選んで調査した。

茲に発表する報告者は、このプロジェクトチームの純農村地区の調査研究を担当したものである。

さて、今回われわれが、社会踏査のため踏み込んだ滋賀県Mはヒューマン・エコロジー (Human ecology; 人間生態学) の観点からして、きわめて興味あるところ。まずその第一点は豊富巨大な水の資源をもつ琵琶湖に面し、さらにはそれに注ぐ鈴鹿にその源をもつ野洲川が、その肥沃な土砂を運んでつくった沖積平野の上にあることだ。第二点は東西に背する三山、三上・比え・比良などの山々等である。前者はその恵まれた自然環境に人々を集め、さらには後者は、それらの人々のところにみず、つまり精神的、文化的風土をつちかい育てたものと言っても決して過言ではあるまい。第三は、日本の政治の統一原点 (近江人物伝・序、林屋辰三郎) 彼は「近江を制するも

のは、日本を制す。というのは私の持論である。日本の政治的統一の原点は、常に近江にあった……天智天皇にはじまる改新の政治。織田信長の手による天下の一統、いずれも琵琶湖の湖畔にはじまった……」こうした立地条件の良さは、はやくより人々を集めここに定着させ、さらには、独特の文化「もりやま」を築きあげ栄えさせた。他方、この担い手であった古代人、もりやまびと（注・先きの林屋辰三郎氏のことばをかりれば「日本の発展につながる進取的な人物……」云々）のそれをみることができるのである。水は近江米の産にその名をひろめた。だが、度重なる自然の恐怖と災害は個々を超えて、より集団的な地縁的結合を強化したし、さらには、このぎずなの結束力は何にほどか信仰の山に比べ、比良、三上山などは無縁ではなかったし（注・梅原猛『湖の伝説』、徳永真一郎（滋賀文学会長）『歴史、民話、伝説、史話が無尽蔵にある歴史の宝庫』、滋賀県老人クラブ連合会編・『続近江むかし話より』）この独特なアトモスヘアーをつくり上げていく上での欠くべからざる条件ともなっていたと理解していいであろう。

したがってまた、今日われわれがこのMに踏み込み社会教育の場を通じて、もりやまびと彼らになんらかの意識の変革を期待し、強いては、われわれが提唱する「人工長寿時代」と高令化社会にむかう新しい実験「より積極的にもが倒達した人工長命をエンジョイするための個人的、社会的条件を満たしうるエコロジカル・システムの実験」を試行しようとする場合、この独特のアトモスヘアーつまり彼ら結びつけている土と水とところ、この精神的、文化的風土をなおざりにしたりあるいは、また、おろそかにしては伝統人「もりやまびと」に近づくことすら、ましては彼らの生活意識を理解したことにはなるまいと考えた。今日、時代が変わり従来のしずかな田園には大衆社会化の波が押し寄せ、まず伝統産業の担い手とその集団は様式を一変させ最早これまでの人と集団とを必要

とした慣習を一討してきわめて個的な市民的な様式（シビルミニマム）と合わせ機械化農業つまり工業化へと脱皮した。当然この変化は人々の生活様式を変えたばかりか人々のところ、意識をも変えつつある。また兼業農化はおろか農業の解体とおもえる脱農化へとこれをすすめ、一層離農へと拍車をかけるに至ってしまった。

昭和四十五年以来、旧Mは新しくK、T、Ka、H、N村の一部を合併して市として装いをあらたにした。さらに市は、発展を期して昭和六十年をめどに「M市総合発展計画」のどかな田園都市なる人口一〇万の田園都市の建設案を採決した。この事業は住民の福利厚生を第一に追求しようとするものと察する。何故ならば、この「M市総合発展計画」にもり込まれた「新市憲章」（のどかな田園都市構想）には、以下に述べるような五つの骨格を見ることができるからだ。

※青い空と美しい木、緑を大事にするまちづくり

※みんな明るいくらしのできるまちづくり

※高い教育文化とたくましい体力にみちたまちづくり

※産業のさかえる豊かなまちづくり

※市民のくつろげる楽しいまちづくり

しかもこれらの新しい事業が先にのべた基幹産業であるこの脱農業の傾向を、どこでどのように止め、強いてはいかに住民の福利厚生を実現し、それを機能させるかが差し迫った問題となりうるであろう。

ましてやおり良く、この新事業計画のなかに今回、吉田寿三郎氏らを中心とした調査研究グループ「M寿令会」ウエル・エイジング」の提唱「老人サービスのワン・ドアー化」が住民や市の行政にうけ入れられ住民参加による

運動を通じて、実現化を推進させ、もって理想郷なる福祉追求の都市建設を可能にするものであればこの上ない喜びとなる。

ところで、しかも筆者らの踏査の目的は、それらの計画を実現させるための住民側の人的資源として、まず地元  
の年寄衆のなかにそのオピニオン・リーダーとして役割りを果すべき人材を発掘することであつた。とくに我々の  
関心事はこれらのオピニオン・リーダーの果たす役割りのうち、その human influence・意志決定の人的影響とそ  
の役割りである。つまり、最終的に個人の意志を決定するファクターはマス・メディアによる広報活動ではなく関  
わり合いをもつ個人の柄や人格から発するところの説得力、つまり human influence によることの存在を無視でき  
ないものと思つたからだ。吉田氏の提唱する「人工長命時代」と高令化社会の認識とその対応としての「老人サー  
ビスのワンドア化」を実現させるためにも是非このオピニオン・リーダーの果たす人格的影響(human influence)  
を一つの仮説にこの問題と取り組みたいと考えたからである。

ひるがえって、もりやま文化の担い手・古代人「もりやまびと」が、わけてもこの上記のオピニオン・リーダー  
とみることができるといふのは先きにみたところである。また、東西に背している三上山・比え・比良の信仰の山  
々が「もりやまびと」の精神風土に無縁でなかつたことも先きに述べたところであるが、今日の年寄り衆のなかに  
みられる生活の信条は、まさにここに根をおろし、ここから生活のエネルギーを汲み上げており、こころの準拠と  
さえなっていること、いわんや彼らの人生観、社会観、さらには哲学、つまり人間の死生観に至るまで、これが培  
養されていることにおどろくべきものがある。が、筆者はすんなりとこれを「信仰にささえられた生活」あるいは  
また「信仰にうらうちされた生活の流れ」と表現したいところだ。何故ならここMは仏教文化と同一化(identification)

caion) されている点にある。期せずして今回われわれの踏査において有力な地元のおピニオン・リーダーたちの幾人かに接し得、その中には今回われわれの研究会「M寿令研究会」グループのメンバーとして迎えることのできた面々少くない。即ち、J<sup>1</sup>氏（真宗寺住職、奈良大学文学部教授、M市誌編集委員・社会教育オルガナイザー）らだが、彼らの編集したその『守山市史』上・中・下巻（S・49）の随所にみられるもりやま独特の精神風土とその担い手、おピニオン・リーダーたちが記録されている。中世、近世を通じての宗教人、たとえば、西の湖にうかぶ千手観音とゆかりのある恵心僧都をはじめ親鸞や血統をもつ蓮如上人、さらには「一休さん」の名で大衆に知られかつ大衆に親しまれた高僧たちのしかも浄土の教えである。浄土つまり現実の世では報いられない苦に對して消極的なユートピアとするのではなくたとえばJ<sup>2</sup>氏らの言（きき込時）によると、正月の門松をこの地方では見られない。それは蓮如上人（地元における三年半の定住）のそのお教え（社会教育）の結晶であると説明される。つまりこれは唯単に虚礼や隨性に流されるのではなくその実を重視するところの精神・これを、人々のところに定着させたものという。従ってまた我々はこうした時代が変わっても人々のなかにそれが生活信条にまで純化され、高められて見事に花を咲かせているのを見るのだ。

また、この生活信条の実証として、我々は先の「守山市史」の中に歴史的事実として、社会教育（岡田繁雄・ガリラヤグループ『通信第五号』（S・52）P・49）と問題解決過程のなかにそのおピニオン・リーダーの登場と存在とをその活動の経緯の中にたどることができる。

たとえば大正六年、岡山県下に誕生した済世コ問制度、本県ではこれにおくれること数年、ようやく昭和の代に入りその二年に二〇七方面、二一七名の委員を組織して活動をはじめている。昭和十二年、それに戦後と「方面委

員制度」「民生委員制度」と度々名称を変更してきたが、その主な任務はつとめて保護救済を必要とする住民の福利厚生の実現のため調査をし、また処遇を実施してきた。時代とともに要保護の内容がかわり、妊産婦とその幼児の保護を主とした時代、あるいはまた青年男女の就労とその生活改善、さらには戦中では軍需労務対策に、戦後は戦争社会事業などに点々としたが一貫して財乏しきなかで、よく地縁という基盤に立脚した組織化につとめてきた。つまり隣保の扶助精神をいかした多彩な活動をこころみ、これが続けて今日に至っているがそのなかで特筆すべき事柄として、Mの郷土芸・狂言「蚊ずもう」にまでなった蚊とのたたかいがある。市誌の中にある「オコリ撲滅」がこれだ。皮肉なことにM特産の源氏ぼたると無縁ではないのだ。つまりこのほたるの特産は同時に蚊、とくにハマダラ蚊の発生源でもあったからだ。これがマラリヤを発生させ永いこと住人、特に老人、子供を苦しめてきたことは想像にあまりがある。ところでこの蚊とマラリヤの撲滅のために行政と住民が立ち上がった事実がある。まさに根気のいる苦闘を続け、ついに全市に及ぶ予防済の散布により見事にこれを撲滅させるまでに至ったことだ。まさに一例にすぎないがそうした住民運動の中に、特に住民の健康問題に関する関心のつよさといきなのがまたはその取り組み方に目をみはるべきものがあるかと思う。さしずめ「解決のための住民の組織化」というのがはやりだが、今日の公害や様々な一人間性を喪失させる力に対するプロテストする一形態として早くより住民組織化による地域福祉問題解決の一つのメドーズとして見逃すことのできない事実とみるべきであろう。「琵琶湖をきれいにしよう」と滋賀県が合成洗剤販売規定を作ろうとしたところ、環境庁が待ったをかけた。相変らず余計なことをする役所（環境庁）」と読売の六月十五日の夕刊の編集手帳のらんにのった。ニューズからも県民のそれに対するプロテストには一種独特なものをただよわせるものがある。

したがってまた、唯今展開しつつある「M総合発展計画」において洪水や災害それに蚊といった直接住民の福利厚生を疎外するファクターに代って高度の産業化のテクノロジーと新薬の結果として人類が自ら取り取らねばならない公害（洗剤汚染）をはじめとする健康問題と弱っても死ねない多数の老人と孤独による人間の問題、共存するためのエコシステム（ecological system）への新しい実験にどう住民が自覚し、この解決のためにどんな組織化が行なわれ問題に処するかが、我々の最大の関心事である。差し当り我々研究班はこの新しい問題のイノベーターの存在と、この運動の担い手として最も影響力、ここでは説得力のもつヒューマン・インフルエンスを求めてオピニオン・リーダーの発掘と、彼ら自らがこの事態をどう受けとめ、これにどう処するかをこの報告では中間のそれになるが記きとどめておくことにする。したがって、あくまでも中間のそれに限定されるが、現にこれらオピニオン・リーダーらの地元老人会の会員と住民を対象とする「人工長命時代に備えて」の学習会の開催に向って、カリキュラムの作成並びに学習会の日程、講師、講演の内容等々につき検討がすすめられ、第一回の学習会を去る昭和五十三年例会に実施されるに至ったこと、引きつづき、その与論化のために他部落の老人クラブの会員と接触し、大いに啓発につとめている様相。さらには、また、寿令研究会のアンケート調査（全教調査）をしているが、この調査の被調査書を会員の所にまわって調査をすすめている。したがってまたつとめて、これまでの過程についてあわせ報告することになるが、そのプロセスを追いながら、断片的ではあるが点の軌跡ともなれば幸いである。

尚、吉田寿三郎氏を中心とするこの研究会プロヂェクト・「小域住民参加型老人サービスセンター化に関する研究―現有老人施設センター化に関する研究」は、昭和五十二年度来厚生科学研究費の助成による一連の継続研究である。同会の研究対象地は市街部M町、Y地区と、コントロール・グループとして準農村部H町H地区Oと設定し



た。筆者らは特に後者のH町O地区を中心にパイロットと基礎調査を実施し、先のオピニオン・リーダーの発掘につとめた。以下、それについて説明する。

## I

プロジェクト研究「小域住民参加型老人サービスセンターに関する研究——とくに現有老人施設のセンター化に関する研究（代表・吉田寿三郎）——」の中間報告である。

本プロジェクトは『日本老残』（小学館）の著者、吉田寿三郎（医科大学教授、日本老年学会理事）の提唱する「人工長命」（弱っても死ねない）の世紀を生き抜くために<sup>1)</sup>を実現する老人問題の社会医学の研究である。

そこで若干その概略についてふれておくことにする。

### I—「人工長命時代」とウエル・エイジングのためのサービス

先きのテキスト（吉田著『日本の老残』）の内、われわれは、とくに第一章・第三の人生とウエル・エイジングに注目したい。何故ならばこの章こそ、氏の言う「人工長命」時代の成立を説明するエッセンスの部分だからだ。今少しく説明する。この第三の人生、即ち誰れでもが、生物学的淘汰、社会的淘汰をこえて生存可能になり、その時期を生活出来るようになった。この人生は、即ち、人間がつくった人生（老後）ということになる。即ち、人類はこの短命時代からそれを克服して得た長命時代は、これをはばんできたかべ…寿命つまり自然的・生物学的淘汰、即ち、感染症の病因細菌との戦いで、その力を低下させたことによると考える。氏はそれを医学の進歩即ちその革命的な改善は他でもない抗生物質という薬剤の発見によりそれを制圧したことである。

ところが、こうして誰れもがこの境いまで生きられるようになった「長命」時代は必ずしも幸せとばかりは言えない問題、つまり、新しい矛盾に人類は気付きはじめてきたのだ。これが先きの渡辺定、尼子富士雄さらには吉田氏らが指摘する「人生長命」時代、俗にいう「弱っても死ねない」時代を人間自らが蒔き同時に自らがかり取らねばならないはめになってしまった。さらにこの「人工長命」はただ医学つまり生物学的レベルにのみ当てはめられるのではなく加うるにその人間の生活を担う社会的背景をも、また人間の存在の「メタモルフオーシス」を現存のシステムの恒常性を否定する矛盾によって、刻々と変化をして生物は適応し存在する生物の発展的生存のメカニズムという基本的理解にもとずいてこれを説明する。即ち「人生五十」をつくりあげていたあつい壁…病原菌との戦いは、まさしく物質的貧困という戦いのそれに対比し、この矛盾葛藤を克服したものが、医学の進歩、即薬物の発見改良が産業の高度化を介した新しいテクノロジーの発見ということになる。ちょうど薬物…抗生物質が感染症を制圧したのと同様、物的貧困をみごとに制圧して人々に物質的な幸せ (Well-being) を保障してくれた。ところが、かくして長命時代に到着した産業化もまた新しい矛盾に直面する。つまり長生きができるようになったものの「死ねない苦しみ」を人間が人工的につくり出してしまったこと、また多数の老人人口という偉業をなしとげたにもかかわらず、その工業化は公害と人間の孤独という新しい矛盾をも工業化の落し子として生んでしまったのである。

ところで、この生物の発展的生存のメカニズムにとって、新しい矛盾を「反」として、その「合」を求める人間的努力が当然必要となる。吉田氏は長命時代の医学のもつ課題として「ウエル・エイジング」(いかに上手にとしをとるか) また社会学のもつ課題として「エコシステム」(いかに共存するか) の必要を求めた。その人間らしく生きる社会の創造とそのプログラムが今日の課題となると説く。しかも、その具体的なプログラムが、第四章…調

和ある人間社会の創造として老人サービスの体系的開発に、その頁をさいている。換言すれば、吉田氏のいう「参加型老人サービス」の開発とそのシステム化である。

さて、この誰れでもが生存可能となった時期、第三の人生の期、これを氏は七十五歳以前としているが、この期こそ、より一層人間らしく生きられる心境と、かつまたもっとも人間らしく生きられる行動とができる特長をもつ期とした。むしろ言葉をかえれば、人生の開花期に可能な時期とまでいう。これはまた、花の落つ時期でもあり、有限の個体の終えんのそれでもある。つまりこの人生をどう終わるか、即ち死との対決を思案するそれであることを強張り、しからばその共に思案する場をつくる社会的サービスの必要を説く。あくまでも長命をいたずらに「負」と考えず、「人工長命」をより積極的に「正」と考え意味づけ、それに向って生きるすがたを、模索した人生設計でもある。

さて、そこで道の設定にうつるがそれは「参加型老人サービス」という耳慣れぬことばであろう。

まず話を進める意味で、その目標とする施設から説明しておくが「老人福祉センター」を小学校区ぐらいの域に原則的に、一ヶ所設置して、ここに人的資源、つまりサービス媒体として住民の生活問題とデマンドを分析する。ソーシャル・ワーカーと事務員、それにニード分析による具体的な治療を実践するためのオルガナイザー(ケースワーカー)と治療家、オキペーショナル・セラピスト(O.T.)さらには、P・T・等々の専門家において地域の最末端の情報蒐集センターの機能を果たすためのものだ。とくにこの施設…センターのケース・ワーカーの役割は、この地域の健康老人や看護婦に基礎的なケースワークの基本とアクセプトと理解的態度を学習させて地区内の社会生活上のニードをもつ老人はじめ、市民の基本的要求を感じ、あるいは、広い意味での生活デマンドに関する情報

をあつめてセンターにもち帰る。さらに、ここでは、集められた情報を、ケース・カルフアレンスを介して整理し専門的診断をつけ、さらに適切な処置ならびに援助を施すことにある。しかもセンターのケースワーカーが社会的処遇をこころみるのではなく、原則として、また情報蒐集集にほん走した老人や看護婦を介して具体的な治療を施すというサービスのシステムである。従つてまたこうした実践を通じて、さらに、センター内のインストラクター（指導者）より高い技術と技能とを習得するための訓練と学習をうけることになる。したがって最先端の老人の生活ニードを吸みあげてくる人的資源これを地域内に発掘し、またそれら開発することになる。従つて「参加型」なることばの意は、正常な健康な、しかも自発的な、老人の隣人としての参加、これのインプットのシミュレーションにある。さらにこの小学校区に設置した「センター」は個人のもつニードによつてはより高次の資源での処遇を受給できるよう、中域もしくは広域の社会資源つまり施設・行政諸機関との連携を保つ。その中域つまり「センター」の上部にいわゆる「老人ディホスピタル」もしくは、「ナーシング・ホーム」と称するもので、短期間収容の可能な、しかも専門的な治療もしくはリハビリテーションをうけられる設備をもち、老人の心身の機能を大きく回復し活発化するところである。しかもこういった地域の施設がひとつのメディア（媒体）となつて利用者の家族との人間関係を切斷喪失させず、土地にとどまりながら、親しい友（隣人）との交友に支えられた老人の孤立化をさけ強いては、文字通り人間らしい老人の立場を尊重しながら効果をあげてゆくマン・パワーサービスのシステムの研究である。

尚、上記の吉田研究を地元では、昭和五年以来M老人ホーム施設長〇〇らの提唱により、さらに滋賀県医師会の後援をうけて、実験・既存の老人センター、並びに憩いの家を、コーディネートとして再調整して、老人福祉デマンドに応えるべく、施設（ワン・ドア・サービスセンター）化をめざす基礎研究が吉田ら共同研究者らの手によ

ってすすめられた。

## I—「Mウエル、エイジング」(寿令研究会) 発足

本寿令研究会は先の厚生科学研究のプロヂェク研究をすすめるために組織した研究者グループ、つまり研究母体の仮の名称である。もともとこの地域における老人問題は、滋賀医師会々長柳原正典、副会長藤井義顕氏ら医師会と、地元M老人ホーム(軽費ホーム)施設長O<sup>○</sup>氏らをはじめとする地元研究グループの提唱する琵琶湖を中心とする人口十万程度の「中域型の福祉エリア」を構想とするものだった。これらの「エリア構想」については、岡田繁雄「ガリラヤ会、みさわホーム通信」創刊号(昭和四十八年)をはじめ、二・三号(昭和四十九年、五十年)、引きつづき第七号(昭和五十四年)による詳細なソーシャル・プランニング「福祉エリア」である。従ってまた、今回のプロヂェクとも共同して研究を進め、総合的な「福祉エリア」の実現をめざして協力することになった。

したがってこの間のプロヂェクト・チームと地元の研究グループとの調整、連携のためO<sup>○</sup>氏が選ばれコ・オーディネイター(co-ordinator)として両グループへの働きかけをおこなった。今少しく岡田繁雄氏の「日本寿令協会、ガリラヤグループ通信」(五・六号)より、そのゆきさつを若干要約してみることにする。まず、はじめに研究会の発案者だが地元「M軽費老人ホーム」施設長O<sup>○</sup>氏より共同研究会の主任教授として「日本老年社会学会」理事、しかも『日本老残』の著者吉田寿三郎氏に接触し依頼した。氏のこころ良い内諾をえて、両研究会が一本となって出版することになり、同時に氏より研究費「厚生科学研究」を申請することの示唆をうけた。

次いで、本研究会のスタッフの人選だが、テーマが社会医学に限定し、広くその方面から人材を求めることにした。医学方面よりはK医大のN氏をはじめ、O医大公衆衛生学教室の院生、さらには社会科学の領域や方面からD

表1 昭和52年度厚生科学研究費補助金の要望課題説明表

(様式2)

番号 (局部ごとに1から 始まる一連番号)		(7) 交付要望額	千円 1,000
(1) 研究課題名		小域住民参加型老人サービスセンターに関する研究—現有老人施設のセンター化に関する研究—	
研究 事業 計画 概要	(2) 研究の具体的 目的及び研究の 必要性	現在既に老人クラブは10万を越え、これに対応する施設も多数設けられている。これら資源を活用出来れば、実現性と有効性とは極めて高いと言える。そこでこれらを新しい発想にもとずいて、老人サービス組織上最も基本になる小域拠点、すなわち小域サービスセンターへと、老人を含む前向きの住民参加のもとに拡張充実させる過程を究明しようとするものである。	
	(3) 研究計画	研究対象として社会教育と住民参加の傾向の高い滋賀県守山市で準農村的速野地区と市街的吉身学区とを選ぶ。まず一般地区住民の老人問題に対する認識を深めるため教育活動を組織的に展開、この過程を究明することが第1年度の主研究になる。このため情報を蒐集し、現状を明らかにするとともに社会資源を掌握して効果的な活用を検討する。また同時にの教材そのプログラムおよびその組織を考究する。他方小域センターが活動へはいるのに備えて、事務員・ソーシャルワーカーおよび作業法員の3者からなる中核チームを当地方のボランティアグループのなかで養成していく。今日まで知り得たところから対象地区第2年度には小域センターが発揮する機能について具体的な検討に入れるものと考え。つまり初年度で得た情報ならびに社会資源からニードデマンドを分類し、対応能力を測って、サービスの重みと質と供給能力を一応明らかに出来るが上記チームは当初は専らこの明細化と老人登録に努める。他面余暇のある老人をボランティアとしてサービスする側へ組み込む工夫する。また専門的なセンターで処理できないサービスを行う能力のある機関との協力体制をつくりあげて行く。さらに老後に備えての学習の場としての拠点への成長をめざす。このようなワン・ドア・サービス機能を充実して水平的でまた垂直的な小域に於ける媒体機関としてのセンターの示現をはかる。これは仮空にもとずく実験的設置ではなく、ノルウェイの老人保健福祉センターの日本版であり、さらに新しい発想にもとずく要請をはたす機能の拡大と総合性を付与して行く過程の究明である。	

(4) 研究期間		52年3月～53年3月	
職名及び氏名	所屬機関名	(6) この課題に関連のある過去の実績	
吉田寿三郎 教授		(5) 予定される希望研究候補者	
年	研究課題名	補助額	
昭36	老人厚生科学研究 老人の生活力実態調査	1000—	
37	老人厚生科学研究 老人の「デイ」研究 ホスピタル（主任）	3000—	
38	老人厚生	3000—	
48	老人問題に関する	3000—	
49	老人厚生科学研究 と保健制度研究費 「生活力」デザインにおける医療供給体制 （分担）	1000—	
50	老人保健	3000—	
51	老人保健管理に関する研究	5000—	

大正教授（社会学）はじめ正助教授（社会福祉学）、本学の故上田官治教授やOsi教授をはじめSs助教授、それに筆者らに白波の矢が向けられ、及ばずながらS助教授と筆者がそれに当ることになった。その他、施設関係より建築家を含めて研究母体のメンバー凡を19名の者が整えられていった。

次に地元への接近だが、これにはまず行政との接触はもとより、地元の共同研究者の発掘にあった。前者は同年同月以来市役所を訪れ、市長はじめ助役企画部長ら市の代表者にあい研究会の挨拶を兼ね協力方を依頼した。それ

に医療関係では県の医師会はもとより、大津市市民健康センター、地元にある県立成人病センター、M病院々長Y氏を訪ね、市の老人の医療対策を担当している第一線の話をうかがうことが出来た。引続き社会資源として地元のセンター、H、T会館（老人センター）、M老人いこいの家、その他諸団体役員らを訪ね協力を依頼して廻った。とくに諸団体の人的資源の中には相当の地元、県の有力者にめぐり会うことが出来たし、後に、本研究会のプロジェクト推進の共同研究者として貴重な人材を得ることができた。

他方、本研究会では先の吉田氏のアドバイスにより厚生省、関係諸官庁とも連絡をとり「厚生科学研究費助成」のための準備を進めた。さらに、研究会グループの組織並びに人事等々を終え研究会発足への準備をし、ついに五十二年七月九日第一回「M寿命問題研究会」の開催にこぎつけることができた。さらにこの間筆者らはもっぱら資料蒐集のため地元との接触につとめコントロール・グループとして純農村地区H学区O部落老人会長田氏に接触した。また氏を介して地元北公民館を訪ね館長はじめO部落老人会（T会）の生みの親、育ての親である当時社会教育のリーダーM仏教会長田氏（蓮如上人ゆかりの仏寿寺開光寺住職）と接触、研究並びに調査への理解と協力を願った。

参考 to 本研究会の昭和五十二年度申請の「厚生科学研究」のコピーと第一回寿令会研究会のメモを付けておくが、本会の研究の事業並びに計画等々、さらには担当領域について参考にされたい。

同年四月にはいり、いよいよ第一回「小域住民参加型老人サービスタウン」に関する研究会「オリエンテーション」を修学院関西ゼミナールハウスにて開催、会は以下のようなことを決定した。（記録より若干のまとめを行なう。）

# 1、メンバーと担当分野の決定



11、延表者 吉田寿三郎（O医科大学教授）

12、教会教育部門 I （D大学教授）

U

13、地域調査部門 It （D大学助教授）

Ya （B大学助教授）

14、医療保健部門 Na （K大老年科）

Og

15、施設計画部門 S （B大学講師）

Oy

16、施設管理 Os

17、幹事 Oy Os

2、対象地区と資料蒐集

2—1、滋賀県庁、M市役所での資料蒐集

2—2、H学区（準農村地域）

Y学区（市街地域）

3、当面の課題

3—1、地元調査（施設・住民団体）

小域における新しい試み

3—2、行事計画（高齢者教室、市民の集い等々）

3—3、カリキュラム、作成

4、社会資源

4—1、老人いこいの家、K公民館、Y公民館

4—2、地元組織づくり（老人クラブ）

5、作業スケジュール

5—1、研究会の日程

5—2、現地調査の方法と時期

5—3、報告書作成

5—4、事務報告

——第一回M寿令研究会メモより——

つづいて、地元H学区O部落への接近と基礎調査に至るまでの経過を若干述べることにする。

## II 地元への接近とその経過から

II—1、現地踏査が老人クラブへの参加まで。さて研究主任吉田寿三郎氏、O<sub>s</sub>らの依頼をうけて、M市H学区、O地区に直接、足を踏み入れるようになったのは、昭和五十一年二月である。以来度々地元を訪ね、ファイル・リサーチのための資源入手をはじめた。（一）手はじめに、地元老人会三代目会長田中氏に会い、ムラの輪郭や会

の活動等々につき説明を聞いた。(一)翌三月には、O・筆者らが地元を訪れ、教育委員会のすすめでM仏教会々長兼「M晩鐘の市民運動」の実践―M仏教会で今年(昭和五十一年)正月を期して毎夕百三十の寺院で一斉に鐘を鳴らすもの。

なお、有線放送でもこれに協力し、同時刻に「イノチの鐘」を放送し寺院の紹介とともに解説もおり込まれた。この会の目的(晩鐘)は市の仏教会の合ことば「生活標語」「このいのちを大切に」による実践活動である。しかも鐘によるシンボリズム、一、仏の慈悲に抱かれる人間に生まれた尊さを知ること。二、自分の尊さはもとより他人を大切にすること。三、大宇宙の生命に生かされている。喜びを体験して心からアリガトウの言える人間となること。四、イノチをかけて犠牲と献身をもってヨーロッパ人間として生きること。(M市仏教会、生命の鐘運動発刊の新聞より抜すい)の推進者「A氏O部落老人クラブ生みの親」と会い、ともにH地区北公民館に館長を訪ねた。B氏より「M山イノチの鐘運動」の住民運動の経過とその地元における「社会教育」を聞き及ぶにつけ次第に住民運動がきわめて活発であることが分ってきた。しかも大きな収獲は地元「守山市史」の編纂の任に当ったM地元の社会教育の大ベテラン「C氏や地元真宗寺の住職、郷土史研究家奈良大教授「D氏らの村の有力者、オピニオン・リーダーらの存在を教えられたことだ。(二)同日その足で「M給与所得者会議」事務局長並びに役員を訪ねた。この団体は以前より地元の給与所得者は元より市民一般の福利厚生につとめてきた団体で、駅前自転車置場の設置、または市内の防犯灯設置等々の数多くの実績をもっている。さらに今後の事業計画としては、会館建設をはじめ急増する退職者の福祉についての若干の計画を急がねばということであった。幸い期せずして今回のわれわれの調査研究に合致するところあり、大いに興味を示し、側面的に協力してくれることを約束してくれた。(四)オピニオン・

リーダー Yr. Uh 両氏へのあいさつと調査研究への依頼、Yr. 氏については現老人会の副会長で、会長のはからいで、会長宅においでをお願い、もりやまについての地理風土、郷土等に関する氏の研究の一端をうかがうことができた。氏は殊に永い間学校の教師をつとめ、これを通じて子供と親に接し、多くの問題と取り組み、解決してきた実績は、まことに大で今後のわれわれの強力な協力者であり、いふなればオピニオン・リーダーであることを確信し得たし、加えて地元におけるもっとも信頼の寄せられる人物であること、さらには、世代を超えてよきオピニオン・リーダーであることを知った。後には本「M寿令研究会」のメンバーとして参加を願うことになった人物でもある。

尚 Uh 氏にも同様の承諾をうけた。

さらに地元長老たちへの接近、あいさつでその他多くの地元有力者を得た。その第一人者は何といっても M 老人クラブ会長(元地元県議会議員) Mr. 氏らで、ことのはか老人の問題に関心をもっており、特にわれわれのプロジェクトの研究に大いに興味をもってくれていることが判った。以上のような望元の有力者を介して直接彼らと接しわれわれの提唱する老人サービスのワン・ドアー化を実現するための協力を依頼できたことはラッキーなことであった。

以上、現地への直接踏査を通じて(一)一応の人脈を理解することができたこと。(二)強力なオピニオン・リーダーがいること。(三)老人クラブの活動が活発であること。(四)準農村にふさわしい静かさがあること。(五)オピニオン・リーダーの役割がいたって大であることなどが、フィールドリサーチの結果、若干の輪廓について理解ができた。これらの情報を中心に本研究会グループにて検討、今回、準農村地区対象として選出した O 部落が調査研究のコントロール・グループとしての役割を果しうることを認識し、したがってまたこれにもとづいて本格的な踏査の調査目標とその日程(予定表)を作成し、その準備をはじめることにした。

第二期、この時期の特徴は、老人会会長より地元老人会への強力な働きかけを要請され、四月の例会より続けて三・四回講話を依頼された（年が明けて（昭和五十二年）からということ）。このまねきに対して吉田らと相談した結果、皮切りに地元のみぎわ園長〇〇本M寿令研究会メンバー氏が、また続けて五・六月と吉田、筆者が担当することになった。吉田は専門の医学的立場より講話を願ひ、かねてからの氏の研究の一端を、まず第一弾として披露してもらうことにした。なお筆者らは今後のこともあり、この好機を十分に活用して年寄り衆との密な接触をはかるため、吉田氏らとはうって変って日本の童話のなかから話題をえらんで講演をすることにした。つまり「桃太郎」「かぐや姫」それに「浦島太郎」などで、先きの二話は、老人との出合と離別、つまりよろこびとかなしみ、この、二つの老の面相について、さらにはまた「浦島太郎」からは、よろこびともかなしみともつかないマジナルな相として、こどくのそれを話題として、年寄り衆の反応を見ることにした。

結果は大変な好評であった。まずその第一は、出席率が徐々に増えてきたことだ。（氏の言によると常時出席する会員（六十名）は約半数で、その出席者が国定している）つまり常に出席しているものに加えて、普段余り出席したことのない会員が除々に出席するようになったこと。第二（会長の感想だが）、(1)話しが好評であったこと、(2)普段めったに出席したことのない会員（病気ではないが）が出席しはじめ、引続いて例会に出席していることなどを、もらしてくれた。また好評の内容としては(1)話しの内容がわかりやすかったこと(2)大学の学生に教えるような講義形式にならなかったこと(3)一方的にいつも聞くような話ではなかったこと、話しの内容が新しかったこと(4)さらに学習の意欲がわきはじめたこと、その他など……以上が会長より感謝された点であったし、加えてわれわれの反省会からも同様のことがら即ち(1)話題が新鮮であったこと、(2)話しの話題が新鮮だったばかりか、これを理解

された点、(3)さらには学習の意欲がでたことなどを挙げ一応の成果とみていいのではなからうかと判断した。とくに吉田氏の講話中、現代の医療制度の矛盾をするどくつき、従来医師と患者との人間関係がその治療の大事な部分を占めていたところを、今では医療による関係になってしまっていることなど大いに共感のもたれたところであった。しかも薬物の害についての話など、ある会員の如きは、薬に対する驚異と不安の色がみせ、話しの後のこつて吉田氏らに質問するなど、かなりの関心と呼んだところだ。他方筆者ら、つとめて本学（仏教大学）の山口研究室四回生（卒業研究生）らは老人会、例会には必ず出席することにし、会員のなかに車座に入って話しをきくなど、さらにはこの例会のはじまる小一時間ほど已爾神社の境内での共同作業「草とりや掃除など会員の手で行なわれるが、それにも必ず出席して一緒に草むしり、掃除、茶の用意、接待などに積極的に参加して出来るだけ全員の生の声や彼らの感想をじかに聞く機会を得ることにした。したがってまた講師らの反応や話しの内容などについても手きびしい卒直な意見をも聞くことができた。それからしても総じて右記に記したような好評をほくしたと言っているであろう。この間吉田氏に市の老人クラブ会長 Mr. 氏より五月の「老人大学開講式」に講演の依頼、また地元医師会への講演などを通じて地元へ呼びかけにも一応の成果を挙げつつあり他方筆者らは、これを皮切りに月に何度か会長宅を訪ねパイロットリサーチを実施し、六月までには本調査が出来る準備を急いだ。まずこのパイロットリサーチのねらいは、会員全体の把握であり基礎的な村の構造や個々の家族構成、親族とのつながり、さらには寺や宮などの関係など社縁（社会関係）につき、さらには個々人の記銘力、学力の程度、さらにはまた彼らの健康状態など大まかにつかみ、今後の本調査に備えた。六月の末に本格的なアンケート調査の実施にふみ切ることとした。

踏査予定表は次の表にまとめたので参照されたい。

表2 踏 査 予 定 表

段階	時 期 自 ～ 至	踏 査 目 標
I	昭和51～52/3月	地元（O部落）への接近 1. フィルド・リサーチのための基礎資料を各機関より蒐集 2. 地元老人会（との輪）への接近 とくに会長より村の事情やその他の情報収集につとめる
II	昭和52/4～	フィルドリサーチはじめる 1. 老人会会員への接近，例会への出席 2. 会員の若干名よりパイロットリサーチのため選出，リサーチを実施する。
III	昭和52/6～9	オピニオン・リーダーの発掘（本格調査はじめる） 1. 基礎調査 会員全員にしつ皆調査 イ）フィスシートによる家族構成，親族関係，学歴，マスコミへの接触。 ロ）生活調査，食事調査 ハ）準拠意識の調査 ニ）生きがい調査
IV	昭和52/9～	オピニオン・リーダーとその効果分析，ピーマンインフルエンス
V	〃	オピニオン・リーダーへ新しいメディア「人工長寿時代とその社会」提示，吉田寿三郎著『日本の老残』配布，この反応をフォローアップしてみる。
VI	昭和52/10 or 11～	「人工長命時代とその社会に備えて」学習会 カリキュラム・テキスト等の作成
VII	昭和52年末～ 53年/3	学習会開催予定
VIII		与論（オピニオン）づくり
IX		現有老人サービス施設（老人クラブ）のワンサイド・サービス化の実現をめざしての市民運動への展開と実現化
	昭和53年 3 月	昭和52年度厚生科学研究費助成—中間報告—

表3-1

地 元 へ の 接 近	踏 査 メ モ
<p>52年度</p> <p>4月例会(〇) Os他3名出席 岡田氏の講話(出席者25名)</p> <p>4/9 第1回研究会へ「地域福祉」の編集委員出席、 本紙へ本研究会アドバイザー依頼</p> <p>5月例会(〇) 講話 M老人クラブ連合会主催 吉田 老人と健康 山口 老人の3つの顔</p> <p>5/26 M老人クラブ連合会主催 老人大学(講師吉田寿三郎) 開講式を受ける</p> <p>6月例会(6/1) 山口「ボックリ信仰」や3の老人のかお (孤独の相) (出席名32名)</p> <p>6/26~28 山口</p> <p>7月例会(7/1) (出席者40名)</p> <p>8月例会(8/1) 地元奥野先生より宗教講話</p> <p>9月例会(9/1) 善野良子先生により民謡 (9/22) 旅行会(出席者29名) (岡田同行)</p> <p>10月例会(9/27) K公民館長(平井英太郎) 講演「生きがい ある老年を過ごすためには」 出席者発足当時の会員のま(20名程度)</p> <p>1、老人の会員を対象に連続「人工長寿シルヴァプラン講演</p>	<p>4/14(5/1) 民生委員老人福祉部会会合(毎月開催予定)</p> <p>10/15 「地域福祉」一九七七年(N74) 「老人サービスユニット」―老残から護る放胆な研究構 想―記事あり</p> <p>10月例会をうけてYt氏宅を訪問 カリキュラムの具体的検討</p>



会」を予定

時期 本研究会の終了までに5回消化したい

全住民を対象とする講演会を計画、演者は内田秀雄、山本武四郎、吉田寿三郎、岡田繁雄の各氏らがこれを担当することとする。

風土と歴史—もりやま人の生活—

汗と涙の歴史—社会教育者たちの歴史道を招くものたちの歴史—

来るべき異様な人工長寿社会とは—1—

をも対象とする講演会を兼ねる—2—

その対策と実現をめざして—ワンドア・サービス—

※レイアウト

表紙 “来るべき人工長寿社会にそなえて”

主催 Mウエルエイジング

1とびら 編集者Itの横がおを紹介

1頁 あいさつ 1、編集者

2、県・市長

3、老人会会長学習会へのさそい

2—4 第一回講演者 レジメ（なお一頁五〇〇字程度）

5 余白 —メモのため—

6—8 第二回講演者 レジメ

9 余白

10—12 第三回講演者 レジメ

小域における新しい試み

11/7 山口、Os カリキュラム案を検討

(1)(2) 項目

イ、学習会準備委員並びに会の組織

ロ、同会のメンバー・

ハ、調査、企画・

学習回数最・低五回以上

会場・O会館 その他

日時・自昭和52/10〜至53/3まで例会にする

演題・「××を学習する会」

演者・内田、山本、吉田 等々

学習時間・六〇分以内にす

ニ、広報・有線放送

ホ、学習の目的・人工長寿高齢化社会に備える

ヘ、対象者・老人クラブ会員並に一般市民

ト、学習時間並びに期日

チ、住民への働きかけ・とくに婦人会へアプローチ

リ、行政へアプローチ

ヌ、テキストの作成 (二〇頁) 発行部数 頁数 活字の

大さ印刷業者などを検討

(案)

1、内田「風土と歴史」—もりやま人の生活—

2、山本「汗と涙の歴史」—社会教育の歴史—

3、吉田「異常な人工長寿時代来る」—1—

13 余白

14—16 第四回講演者 レジメ

17 余白

18—20 第五回講演者 レジメ

裏表紙 「M市総合発展計画」より五つの標語を抜すい

を印刷する

第一回 M市O老人会主催「Mウエルエイジング」講演会 O

会館

12月例会(12/3)いつもの様に例会までに神社の掃除

天気(はれ)

講師 内田「風土と歴史」

。「子はうしろから学ぶ」

社交の場

ムラにはさまざまな寄り合いがあるが、その一つ親族同志のそれとして、互にその先祖を大事にするほんこんさん(ごかいさん、ごえさん)ごちそうをよばれながら世間話しからうという仏法(死んだのちのこと)が話題になり妙好人の気持にならせてもらうとなる。こうした老親たちの生活が次の世代にうけつがれている。この過ぎ去った人々を思い出しながら生きる(仏神と一体になって生活する)

4、吉田「異常な人工長寿時代来る」—2—

5、岡田「対策とその実践をめざして」

ル、副読本・吉田著『日本の老残』その他の小冊子

オ、予算・調査費 テキスト印刷代(山口研究グループより分担二万)

ワ、学習効果 感想、意見、意識の変容・

カ、カリキュラム・

ヨ、「……を考える」市民運動へのプラン

タ、吉田著『日本の老残』地元有力者オビニオン・リーダー並びに組織団体へ贈与(一五冊)

11/27 Y地区の総会各自治会40名参加(盛大)

出席者22名

出席 Cマ、筆者、吉田、山口、岡田、在学生、大下、6名

感想

・いつものふん囲気とはことなり、会員が講師を囲んで座にすわり、自由なふんいきのもとで集会がもたれた。

・地元のこと故比較的関心があり熱心に聞きいつていた

・講師も見事な話術で、聴衆をひきつけ、一人一人に話しかけるように話された。

。近江の三重ほう

(1)家の仏壇 (2)台所、戸だな (3)庭、牛

見積概算

為国印刷KK (京都市右京区花園北町7-1)

一部 七、八〇〇円

Ⅱ—二、踏査実施から「Mウエル・エイジング」への中間報告まで

表3-2

日時		経過		申し合せ事項	
第一回 研究会	テーマ	昭和五十二年厚生科学研究へのアプローチ (主任研究者 代表 吉田寿三郎) 同研究に対して厚生省より研究交付金決定 「小域住民参加型老人サービスセンターに関する研究」 研究の目的、現老人サービス施設のセンター化を計るもので、これらの資源を老人福祉のため実現性と有効性を求め、それを実現することを目的とするもの、そのため現有の老人クラブセンター等々の資源を、サービスの消費を求める小域拠点 (リファレンス・グループ) 筆者らを中心とする。住民参加を考える、さらにはまたこれへの実現への過程を究明するもの。		サービスの再配分、サービスユニットの構想、媒体メディア (media) についての説明 作業の分担 (速野O部落、山口S助教授) 風土に土着した連体性の研究 ↓ 吉田、D大I教授並びにIoら分担	
		(4/9) 吉田より 関西セミナーハウス			

小域における新しい試み

第二回 研究会	(7/9) 京都ホテル 山口6/26~28	調査の中間報告 SY → 第二回研究会より地元から (Uti Yui) 両氏を正式に研究会メンバーに加えるへ依頼、出席される。
第三回 研究会	(9/10) 吉田より 産業化によるパブリック・サービスの必要 サポートの問題につき説明あり、この社会福祉の実情 (ス・英) の公的扶助が変わりつつある。これにかんがみ 日本ではその (Public service や Support) 公的サービスの未熟。 失ったとはいえ残っているサービスの再配分、この再開発を考慮に入れての医科学と社会科学との総合科学 (第三の科学) の必要を強調した。 Yt (E) 戦後の社会教育にはソーシャルワークなる認識の欠如をとき大いにこの研究会の進展に期待している旨を述べた。	研究会の初年度 (S/52) — 社会教育次年度 — センター構想の実現 Y ↓ H 地区 (山ログループ) — (1) O 部落 (1) オピニオン・リーダー発掘 (2) カリキュラム作成 (住民主体) → Yt カリキュラムの内容の中に積極的に取り入れる姿勢のあることを表明
第四回 研究会	(10/ ) 京都タワーホテル	カリキュラム (案) 老人と人権 老人と福祉 そう年と福祉 婦人と福祉 —— 社会をみる目を養う O 部落の踏査のための事業計画並びに予算書提出依頼。 あいことば決定 (1) 人工長寿の時代 (2) 高令者社会

	<p>(3)カリキュラム作成を正式に山本氏に依頼そのための予算化をはかる</p> <p>○地区踏査費(予算案)提出</p> <p>10/25本プロジェクトより二〇〇、〇〇〇円受領</p> <p>11/11京都タワーホテルにてカリキュラム検討</p> <p>○地区グループのみ集う</p>

11/11 於 京都タワーホテル…研究会メモ

カリキュラムについての検討

カリキュラム(メモ)

- イ、10月第四回タワーホテルのM寿令研究会会議により、カリキュラム作製についてM氏に依頼
- ロ、同月〇〇、筆者ら、M氏宅を訪れ、カリキュラム(私案)を検討した。項目は別表にて一応の合意を得る。
- ハ、第五回タワーホテル会議により、学習の内容(テーマ)(1)人工長寿、(2)高令化社会に統一する。
- ニ、〇〇氏と(11月7日)カリキュラム案を検討する。

検討項目

a、学習会準備委員会(仮称)

組織

b、メンバー

委員長

書記並記録

委員

老人クラブ会員

そう年・青年

婦人会員

その他

c、調査・企画

会場

日時

演題

演者 地元より選出

市の行政担当者

公民館長

開業医

教員（小・中校）

保健婦 看護婦

その他

研究グループ

司会

広報 有線

「××を学習する会」運動

d、学習の目的

来るべき異常な事態「人工長寿」「高令化社会」準へて学習し、健康で文化的な生活を営む為めの自覚と“社会を見る”を養ない共に生きる世論をつくりこれを実現するための運動

e、対象者 イ、老人クラブ会 ロ、ヤングエルダリー ハ、一般婦人並に住民

f、学習時間並びに学習回数

一回当りの学習時間六〇分

回数五回但し老人クラブ例会時月初め実施昭和52年10月、11月、12月、昭和53年1月、2月、3月

g、1、会員への啓もう

2、学習の内容を家庭で話し合う

3、部落内の家庭主婦への話し、働きかけ

4、運動の輪を全市民へ広げ、呼びかける

5、老人クラブ会員一般市民の合同集会

小域における新しい試み

人工長寿、高令化社会に準へる主さい者

吉田寿三郎氏を招待、講演の夕べの開催

6、学生、青年層への働きかけ

テーチ・イン

7、行政指導者への働きかけ

8、小・中学生

「うちのおじいちゃん・うちのおばあちゃん」作文発表会

h、テキスト

使用する

頁数・部数

内容

執筆者 Yt. 吉田寿三郎

活字の大きさ

わかり易さ

読み易さ聴視覚をとり入れる 学生のボランティア

メモ 余白 二、三頁用意

i、副読本



吉田寿三郎「日本の老残」小学館

〃 「老残憂記」学士会々報一九七五

〃 「参加型老人サービズ開発の前提とそのシステム化(1)(2)

連載体系的老年学のために

〃 「老令化社会における健康観―弱って死ねない人工長寿の世紀を生き抜くために―」

## j、予算

厚生科学研究費

調査費 二〇〇、〇〇〇円也

支出の部

1、「日本老残」冊十五部落有力者への贈呈

2、調査費

印刷費(アンケート票) 一〇〇部

人件費

交通費

食費

テキスト印刷 二〇〇部

3、雑費

小域における新しい試み

k、共同研究グループへの要望

演考

調査

相談、助言

老人よろず相談

l、学習の効果についての追跡調査

感想・意見

意識の変容

態度の変化

m、学習内容（カリキュラム）

案

講師（案）

一回目、風土と歴史—もりやまびとの生活—

U<sub>h</sub> 氏

二回目、汗と涙の歴史、即社会教育の歴史

Y<sub>t</sub> 氏

問題解決

三回目、異常な事態人工長寿・高令化社会

吉田寿三郎

（二回）

四回目、対応と実践

O<sub>s</sub> 氏

表 3—3

日時	経過研究會	申し合せ事項
第五回 研究会	<p>研究会名称決定「Mウエル・エイジング」</p>	<p>2、カリキュラムの内容と日程の決定            (時期で) (講師)            一回 12/1 例会か 12/3 内田            二回 1/17 総会 山本            三回 2/1 吉田            四回 2/12 2/14 (日) 地元の住民            五回 3/1 吉田・岡田            なお 2/19 (日) 公算強し            3、カリキュラムは筆者らが担当作成する。            原稿の依頼、印刷、レイアウト等々            12/3の研究会后、吉田・岡田・山口・矢野・大下らと会合をもち引きつづき岡田が山口の代行をする。カリキュラムとテキストの私衆を岡田に手渡し、若干の説明を加えた。            テキスト原稿用紙 400×4=1,600            4、対象を代えて、老人向・婦人・中乃年向、各一、〇〇〇づつ印刷            5、活字の大きさ、さし絵、イラスト            6、〇部落予算、各氏に提出、基準使用項目を後日岡田より連絡あり。山口も学習へのさそいを依頼され受借し原稿を送りとどける。</p>

小域における新しい試み

(12/3) レイクビワホテル

会食

出席者 県

オブザーバーM病院々長

組織団体

地元 Yt・Uh・Eb 婦人会代表 老人会長 Kai

研究班 吉田 他仏大生二名

報告事項 1、総会

2、山ローOの中間報告

3、Yt氏よりO部落での講演会明催の報告あり。

会食後、吉田・Os・山口ら集り、(11/11) テキストのレイアウト各項目につき再検討し再確認した。

1、編集者代表

副研究主任・Uh・Yt・吉田

2、レイアウト決定

3、以後一斉Osが担当出来るよう引きつぐ

4、形式

B5、活字の大きいもの、社会教育シリーズ、市の同和、老人問題等々の大きさにそろえる。

5、老人、青年、婦人向の三通りを印刷する。

6、印刷費については吉田私案あり。

12/17までに吉田・Df両氏より申し入れる。

(12月) 予算に関する会合

1、学生・教師・院生等々の目当を検討依頼する。

(Yグループとの調整)

## 2、会費・宿泊費・旅費……

充分話し合えず次回もちこし。

この節では、最初にわれわれプロジェクトチームの現地（M）への接近についてふれた、ごく一般に滋賀県の県民性の特性として県民と県民外との間には、よそ者という意識上の区別があつて表面的にもまた顕在化している。そこで、われわれはこれらの意識上の特性を考慮しながらも、できるだけ早くその突確口を開いて、県民・研究者グループが一体になって来るべき「人工長命社会」に備えて、具体的な老人福祉サービスの提供をせねばならない。そのための理解と協力を得なければならぬ。しかもわれわれは社会改良のプログラムを一方的に県民に提供するのでなく、あくまでもその社会改革の担い手としてのホピニオンリーダーを地元から発掘し、真の「住民の住民のための福祉」を築きあげるために住民が自覚をし、その強力な担い手として市の総合開発のテーマである理想郷（田園都市）の建設が実現するための基礎研究となる。したがって上記のようなプロジェクトチームの態度を確認しながらムラに接近することにした。もち論、わがH学区への調査者（仏大山口研究室の3・4回生）には特別の合宿訓練を現地で実施し、最低必要な調査者としての心得をマスターしてもらい現地に入った。しかも何度もくりかえすが住民に接する態度だが、単なる「調査家」や「教師」のそれではなく、いうなれば「英国セツルメント運動」の如き精神即セツルメント——住民とともに生活すること、さらには一緒に問題を考えること——である。そのため彼ら（住人）との間の違和感をまずもって取り除かねばならない。それが地元へ接近する場合の最大にして最高の突破しなければならぬ難関だ。従つて、われわれ入植者（セツラー）の心得（C・H・クリーの示

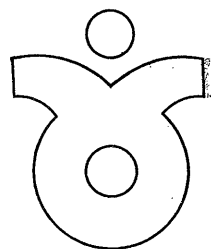
唆する第一次的集団の特質性。(1) face to face, (2) intimate association, (3) co-operation,)をつらぬき通すことにした。つまり出来る丈けあらゆる機会をつくって直接的に顔と顔をふれ合うことだ。しかも近距離での接触をより多くすること、さらには何らかの作業を共同すること、つまり一緒に仕事をする事、従ってこの2つの第一次的な要件を介して相互にでき上がる心理的空間(「われわれ」)と親しみを感ずる仲間集団に発展させること、等々を確認して部落内に入った。

幸いそうしたトラブルや低抗もなく、初期の目的を果たすことができた。それは住民自らが我々の提供した「人工長命時代」に関するメッセージ「弱っても死ねない時代」に大いにとまどいながらも今後どう生きるかに関心をもっていただき、引き続き老人自らの学習にまで民度を高揚していった事実は高く評価していいものと思う。詳細については後の章で述べるが、まさに住民運動の鉄則とした——住民による、住民のための——という意識が呼び醒され、今やこの未踏の草の根をふんで作った人跡は、次々に後から来る人々(運動家)によっていつしか人の道となっていることにわれわれグループは喜ぶものであり、そこで次に少し、地元の様子についてふれておく。とくに「もりまま人」をつちかい養ってきた文化・風土にまで探り、人間共同のプロテスタント精神と運動のルーツに迫ってみようとするものである。

### III — 対象地 歴史のまち もりやま

#### M市のシンボル市章

M(もりやま)の頭文字「も」(平仮名)を圖案化したもので、平和・円満・市勢の発展を表徴化したもので、



M市のシンボル市章

これは先に旧M町の町章を全国から募集した際に採用したもので、昭和四十五年七月一日、旧M町にK、T、Ka、Hを合併して滋賀県の新市として、誕生した際、旧M町の町章を新市のシンボルに採用したものである。

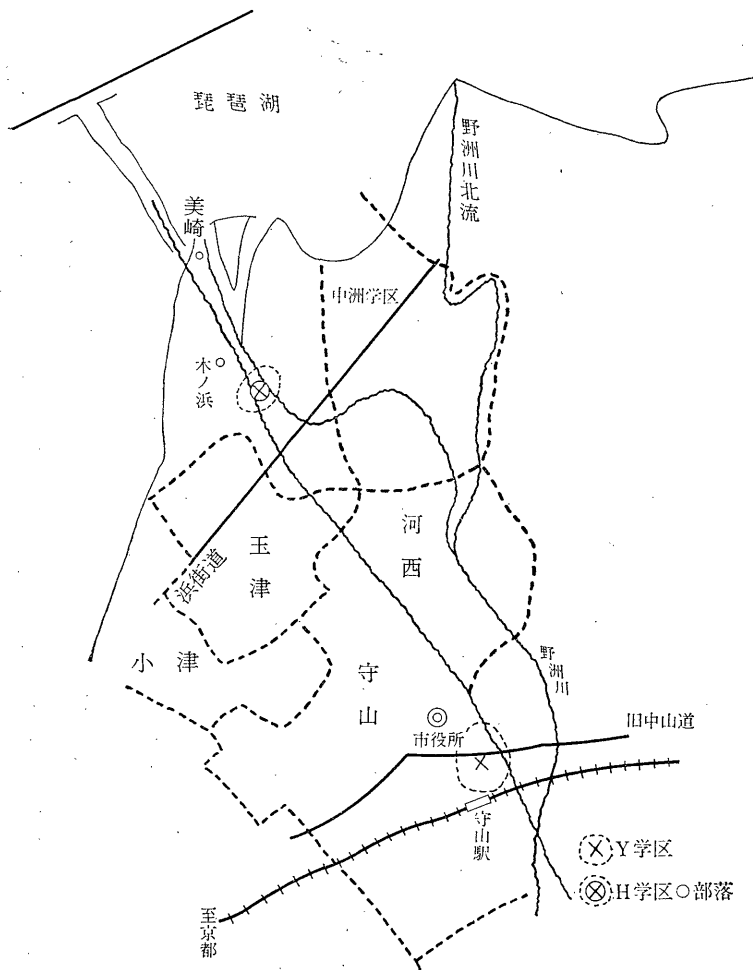
この地、Mは、その地名のおこりが、頼朝の「もる山」に狩をした（建久元年）時のうたに「もる山のいちごさかしくなりけり」とあり「もる山」とも、

承久三年の承久の乱、関東軍幸島、八山などの一門より離れて「社山」を先立ちして相模や武蔵に着いたとある「吾妻鏡」その後「大平記」には「森山」……とさだかでない唯今世に入り、承応年間、「近江国の郡村一覧」によると、野洲郡七ヶ村中「森（守）山」とある。

このMを語るときそれは必ず「歴史の舞台」野洲川を語らずにはおられない。しかもこの河川の下流から湖岸にかけてのびる扇状の三角州この上にMが形成（「三角州上の守山」）されてきた。この平野もりやまは南端、立入町の標高一〇二・八メートル、北の端、美崎町は八五・一メートル、標高差わずか一七メートル、勾配六分（千分の一・七）にも満たないゆるやかな勾配をもつ、従って山岳や丘陵部のない全くの平野で、東西六・三キロ、南北一一キロの広さをもつ市（滋賀県の七市の最も小さな市）県面積の僅か一・〇九%に当たる。

さてM市の中心市街地にある市役所を例にとると北緯三五度三分、東経一三五四度八分、標高九七・六メートル、また位置は野洲川の三角州に広がるMは琵琶湖の地狭部に突出する野洲川と湖岸に接し、南は東海道新幹線に沿って栗東町に、東南は野洲町、東北は野洲の北流、中立町と各々接している。さらに西は境川と接してほぼ南北に草津市に並ぶ。

表 5 M市





概してMは、野洲川の左右にあふれてつくった扇状地また湖に注ぐ傾斜に沿ってつくられた方格状の水路によってくまなく灌漑されたところだけに、水との文化、つまり水との深いかわりをもつ歴史風土<sup>①</sup>と言っている。これは「はじめに」述べたように、地理上の特徴で滋賀県下は、中央に琵琶湖をもち、北には日本海、南には大阪湾、東に伊勢湾と三方海にかこまれたところ、さらに鈴鹿山麓に水源をもつ野洲川に關係している。とくに湖岸に接する野洲南流・北流の川すじにのびる広大な三角洲の台地（沖積平野）は緑と良質の水<sup>②</sup>に恵まれた肥沃な田園である。

① 守山市史（上巻）三頁「歴史の舞台となるこの地を形成した野洲川……」

② 〃 〃 四二頁飲料水・井戸「カチコミ」（浅井戸）「ドッコイシヨ堀」（深井戸）

簡易水道（取井戸）野洲川提防下の親池から竹官や暗渠を引いて各戸に導水するもの……

③ 〃 〃 （第三章一参考）

四五頁土地利用（屯倉、条理）水田地帯。地域の大部分は豊かな二毛水田地帯（全耕地面積の九二・一%

水田・昭三九）

七八頁防水止の跡、多くの災害を予防し氾らんの拡大を防いだもの

一方、とくに南北に走る野洲川の土砂によってできた洪積層の台地も、そこを流れる南北の両野洲川が市内よりも数一〇メートル高く、海拔一〇〇メートルのところに位置しているため、一度鈴鹿山系に豪雨があれば「守山町誌」の中にある。「明治四五年大雨至ラバ汎らんシテ田圃トイワズ家屋トイワズ其ノ害ヲ受クル」……等々水かさが増し、この提防が決壊でもすれば、たちまちにして、市内全土に洪水をもたらすことになる。

湖の水は、さらに暖地寒地の漸移接触地域の役割を果たすために、また生物の宝庫ともなっている。たとえば動

物界では南北両型の交差地となっており貴重な種類をのこし、古い湖の淡水魚、さらには植物界では水生植物をはじめ淡水藻類の生棲などなど、またヨシなどの水生植物がよく繁茂し、小動物たちの繁殖に適したところとなっている。その他とところどころある湿地帯や沼地が多く、ここに生息する動物の種類も多くみられる。同時に反面今日では撲滅されて発生をみないが、ハマダラ蛟によるマラリヤの発生源ともなり、一種の風土病として住民を病ませたことも事実であった。

豊かな野洲川の水に恵まれた水系守山は、さらに年間の降雨量なども県の平均(158mm/年)雨量とも相俟って、良質の近江米を産し、早くより穀倉地帯として、発展してきたところである。

たとえば、資料がはなはだ古いが、昭和四十四年の農業センサスによると、県の四二%というきわめて高い実収をあげている。またただに良質の米づくりだけではなく、米を原料に清酒や味噌、さらに油等々の産業を発展させた。その他、陸地産業としては、野菜づくりをはじめ、仏花、ほたる業、宿場など製造販売、行商に生計を営んできたことがわかる。また琵琶湖とこれに注ぐ河川を利用しての漁業には独特の伝統漁法を生み出したばかりか、唯単に、魚類だけでなく、貝類、とくに淡水真珠の養殖して、真珠産業をおこしたことも特筆すべきことであろう。

歴史の舞台「もりやま」こうした自然環境は、水利を求めていにしより人々が集まり、ムラをつくり、同族をして集落<sup>⑧</sup>をつくって住むようになり、さらには、その産業を発展させ、卓越した米産の地域に至ったが、この水の文化はまた、人間の精神風土と関わりをもち、独特のもりやま人のパーソナリティ、シンクロニズムを生み、ここに歴史を拓きはじめていたのであった。

その昔、採集時代、つまり古代にその歴史の源を求めるならば、すでにここMは、古代人の生活の場として登

場する。きわめて、古代人のゆかりの土地でもある。次いでおこった農耕時代米づくりには、この立派な証明として川沿いに分布する「屯倉」「県」地割と思われるものが残在しかつまた、銅鐸<sup>⑧</sup>など数多く出土している。古事記「安<sup>やす</sup>口造<sup>くさく</sup>」なる一族を榮えさせた住民跡が発見され、古墳時代のいぶきを感じさせるところでもある。また集里などにもこの名を残している。屯倉（みやけ、五三五年）―文化の改新（六四六年）に行われた条里<sup>④</sup>（六町の土地割り）がみられる歴史上極めて重要な文化のゆかりの地としてみることができよう。他方、先に述べたとおり、三方海に囲まれた地理上の利は、西にひえの霊場、仏教文化の道場の地となった。

- ① ムラ…弥生時代に農耕がはじまり定着するころ、山地・丘陵の舌部・扇状地末端の湧水帯から開発がはじまった。守山市史（上）五六頁

高床式住居、壁穴式住居跡

守山市史（上）一九〇頁「群居する農家」

- ② 東西南北に走る直交式道路と条里村

- ③ 三品、英によるとこれは古代のまつりと解釈されている、またその出土は集落跡からではなく聖なる場所からである。守山市史（上）一〇一頁

- ④ 守山市史（上）八七頁、一二五～一三四頁

さらにもう一つ、Mのサム、シングを語らずしてMを語れないものがある。それはこの自然環境にうらうちされた、人の環境文化仏教文化である。「はじめに」も述べた如く、ここMには神社、仏かくが他県には見られぬ程多く存在する。これはMがそれを受け入れる土壌があったと解して良い、例えば「滋賀県遺跡目録」によると白鳳時代の寺院跡が湖南地区に十三ヶ寺、また（「扶桑略記」）には五百四十五ヶ寺もあったと言われている。これからし

て仏教文化の地とも言える。さらに奈良仏教の成立とともに鎮護国家と国土安穩、平和を招来する理想国のため国ごとに国分寺建立の詔が聖武天皇（天左一三年）のとき出る。その頃万山寺の造営が行なわれる。続いて大安寺壘田の成立を経て平安京に至り、寺門の興隆がみられる。これを『守山市文化財』を参考にすると安楽寺をはじめ、東福寺、蓮生寺、小津神社、東門院真光寺、福林寺などに安置されている仏像にそれを見ることが出来る。例えば安楽寺には木造千手観音像東門院への木造十一面観音立像など国宝が多く保存されている。さらに莊園の成立で目をみはるものは「式内社である」これは野洲川のあらぶる神を鎮魂するもので、とくにH町O部落には巳爾乃神社があるがこれは「延喜式」にある二座鎮座の一つで、現在ではかいふつとおまがりに祭祀する、さらにこれを経て、浄土教の発展期を迎える。今日M市内には一二〇の寺院があるが、真宗八七寺院、浄土宗五ヶ寺、これに時宗四ヶ寺その他となっており、各寺とも鎌倉時代の末期の草創をつたえている。

特に中世、新鎌倉仏教、これは奈良の六宗と天台、真言二宗を加えた八宗は中国からの伝来の学問とし、国家ないし貴族の仏教であるのに対してこの鎌倉時代に盛んになった宗教は民衆の念仏と禅と法華だが、これがまさしく日本的性格をもったものとなったことを意味する。従ってまた、この時代の宗教もMは決して無縁ではなかった。むしろ今日のMを語るにはこの念仏、禅、法華を抜きにしては考えられないほど、とくにそのもりやまの風土は真宗の念仏のそれである。

その他、京都愛宕社への参詣も火伏神への信仰（「愛宕信仰」）毎年六月二十四日、溝中をつくって参詣さらには「湖東三三所霊場」、M、東門院第一霊場として三三番・社場水保観音寺、野洲川流域の村々に伝わる「観音堂まわり」その他地像信仰、等々、以上概略のべたがよくにもりやま人をはぐくんだ精神的風土となつてゐることが分かる。

この仏教師たちの文化接触をするゆかりの土地として、古くから衆民一般に宗教的風土を養い育ててきた。他方の他の地方の文化交流は、しんらんの教示、人間の臨界状況における人間の疎外に対して、力ある権力への抵抗として一揆（近江一揆、応仁二年）がこの各地にみられ、激戦地となる（守山市史（上）二三九頁）尚さきの東西南北に結ぶ主要な道路は、往系を形づくり、東山道、一六四二には守山に宿場を、中山道には一六四二中仙道宿駅をつくり宿場や鉄道を栄えさせた。さらには市を発達させるに至った。とくに現代にまで残る姫小松、模などが仏花中心の花市などが盆八月十二日と暮十二月二十七日の年二回開かれているのもこの時代の名残りである。とくに守山に伝わる伝統文化のうち、琵琶湖の漁法エリや、野洲川のやな等の漁法、さらには、水道工事の例は挙げたが、その他、米づくり農法<sup>⑦</sup>、酒造り、しぼり、スエ、縁物、保存食（ふな寿司）さらに雨温と相関の米の豊凶ともからみあつて天井川の提切や（これは旱魃時の田水確保のため）、中山道のために野洲川の仮橋のかけ作業など、とくに生活に密着したものが少くない。

すでに述べた如く、古事記に「安国造」の一族が、ここに居住していたことは、居住跡や古墳などから容易に想像がつくがそうして大古の代より、人々がここに住んでいたことになるがおそらく古代人から言い伝えられてきた、口伝伝承の類にも決して少なくなく、今日まで受継がれてきたものが少なからずあるかとおもう。まさにここは民話の宝庫でもある。

たとへば、近江周辺にいた悪い族どもを退治するため、神自らが足でふんづけて、そこに水が貯って出来たという琵琶湖、美しいビワコの湖水に天衣をまとった姫君が舞いおりその身を浴したというロマンス、さらには、湖に生息するまぼろしの魚それに源五郎フナなど枚挙のいとまのないほどある。

また、沼地に住んでいた、主（赤蛙）が突然変身して、全国にその名近江商人を広めたことなど、実に興味ふかいものがある。これらについては、最近老人クラブが公刊した『近江むかし話し』（一・二刊）や横山幸一郎らが編纂した『近江事典』（学習研究社）なども大いに参考にならうかとおもう。

とくに、今回われわれが踏査した。O部落は現在部落の南側を国道にそって東西に、田んぼの灌概用として流れる川、法流川があるが、もとは法龍川で龍（タツ）の川であった。少くとも龍にかかわりをもった地名である如く、これにかかわる物語りや古老たちの話しも決して少くない。例えば老人会会長E家の先祖は、佐々木綱良で佐々木氏族の出である。毎年その十月に同族会がもたれるが、そのE家に伝わる古文書のなかに、この先祖が龍を退治した記録が残されている。残念ながら地元の学者らの手によって解説できぬところであって、判明しないところが若干あるが、主旨はその龍の退治によって償報をもらって、このO部落に住みついたところである。そこでその家の主より聞いた話を若干要約してみるとかつてこの土地には大きな龍がいて人々をおどし、ときには出沒して、大の大人四、五〇人をおどしたという恐るべき龍のはなしだ。なんとしても龍を退治しなくてはならなかったが、人々はそのすべを知らなかった。おどされるままにはなるより方法がなかった。ついにこのE家の先祖が、これに当ることになった。ところがかんじんの龍は湖に身をかくして一向に姿を見せず、ときに湖西の白髪神社に参り願をかけ、その満願が明けそのお札に行った帰り、今の太橋あたりに姿を見せはじめ、急ぎ下って見事に龍を退治できたというのである。

そのほか、古老たちの空中に舞い上った龍をみたとか、実際これに関わる話しや龍の手首、頭、足などのミイラ状態になって、いくつに残されていることなど、実際にわれわれが、この目で見ることできたりしており、枚挙

にいとまがないほど龍に関する話しが村人たちの心にはある。したがって調査の途中などこの話しになると、年寄りの態度が一変して身をのりだして、ムラに伝わる龍のはなしに、時を忘れるほどだ。

ところで社会病理学上きわめて特異な現象だが、動物のつきものがある。とくに山陰地方にはそれが多発するへびつき、きつねつき、犬つきの名で知られているのがそれだ。その他動物の霊が人間につくというのだが、われわれの調査したO部落にもこれと似た話を聞くことができた。

以上、我々がみてきた歴史の舞台となったMは、概して静的に対して動的ダイナミックな感じを受けない訳にはゆかないものがある。その一つには、人間の生の生き方即一揆、争いや戦いの場がここにはある。例えて言えば……古代では水にちなむ争い、とくに野洲川を荒神あらひつみとして神格化し、司のあるもの、野洲川とその周辺の村人との緊張関係を語るものである。また、別名「近江一揆」として、世に知られている農民の抵抗運動。

近代の中世史には近江源氏佐々木氏の歴史だが、後に六角と京に分かれるが、「守山合戦」（野洲川原の戦）に導く、さらには戦国時代、下剋上する成出者の風潮が領主よりの重臣に耐えかねた農民たちがつよく反揆して一揆をおこす。これが「金森一揆」（元亀元年五月）、さらには、寺社領を「村方の騒動」（安政六年）また、最近の昭和史には「労働争議」、野洲川改修に伴なう「測量中止」を呼んで道路に座りこんだ実力阻止など……

その二つは市宿場である。これは信長の金森城門城後世情も落ちつき、町並も復興したのを機に全国で七番目の楽市、楽座の制礼を与えたことによるものだ。今日この残りは市場町金森に残っている。さらに「京発ち、守山泊り」のM宿だ。これは鎌倉幕府が駅を定め（文治元年）奉行を置いて事務をとらせた。延宝五年にはM本宿には七七軒にも及んだといわれている。（守山市史（上）四三五頁）

最後に述べておきたいものは、これまた野洲川の氾らんにみられるもので農民らのプロテストであろう。

即ち、文久二年の「五人組御仕置帖」に放置すれば復旧の見通りがつかないとき、「打返すべき場所地主ばかりの刀に成難き所は、村中のもの助合候て立帰候様致すべき候」云々とあり、村中のものの助け合いの必要を説いたところがある。これが近世にうけつがれ、防災、防火の戒の実践として火伏の神の信仰（京都愛宕社への参詣）さらに愛宕講をつくった由縁である。

さらにはムラの共同体的結合の一つの形態講や結を組織している。前者には伊勢講はじめ、報恩講、和讃講、行者講さらにはムラに伝世された尊物を中心とする観音講や薬師講がある。この寄り合いを通して一層コミュニティ感をつくり上げ生活防衛のための一助となっている。

その三は、Mは社会教育の場としても特徴のある地域だ、数えただけでも公民館活動、家庭教育学級、婦人学級、高齢者学級、青年社会教育学級、「こんにちば」対話集会、市民のつどい、草の根活動、同和教育等々盛んださらには昭和四十一年厚生省より認可をうけた「社会福祉協議会」社会福祉の母体として住民の幸せに大きな門戸を開いてきた。

⑤ えりーフナ、コイ、モロコ、ウグイ、アメンウオ、ハス、アス。  
やなゝはす、ます、あゆ。

を漁獲するのだが、例えばえもの製法も秘伝で木の浜職人の作ったエリは普段の職人の三倍もの漁獲量の差があるという。最近はこの漁法が島根、鳥取地方の淡水湖でも行っているが、えり職人はこの滋賀県木の浜の職人が出向している。

⑥ 野洲川の伏流水として（地下水）を利用して、とくに良質の飲料水ともなり、また清酒の水ともなったが、水源地の本地から名組まで竹製のパイプに水を引くが、途中ひかりと称する水製の結合部分とこれを接続せねばならぬが、地内五尺程の深さ



のところに埋めるため、この接続部分が困難で、とくに守山、草津の職人でなければ、水もれを起して使用に耐えないという特殊な技術が伝った。

⑦ とくに米づくりでは、この地方の米が、滋賀県の標準米として、当時より反当り一〇俵の収穫があつたが、ここでのこの値段がきまるといふ良質の米を生産していた。

かつば、龍神、大キツネ、蛟等をまつわる獸神神話の類いが少なくない。

### III—二 守山市の現況

さて、こうして現在に至つたが、ついに昭和四十五年合併以後、五町、四三九二畝、昭和五十二年二月しらべでは、一〇、四六六世帯、人口四二、四四九人、男二一、一二〇人、女二一、三二九人の生活の場に至つたが若干古い統計になるが、昭和四十五年度の国勢調査の結果にすると（M市）七七二世帯、総人口三四、七八五人、内男女比は一对一で、男性一七、二九八人、女性一七、四八七人となっている。他方、本踏査のH地区では、世帯数では、一〇六〇、人口にして、男性二四五四、女性二五八六、総計五、〇四〇人となっている。尚、性別、年齢別は次頁の図に示す如くで、人口の横型のピラミット形でも、つり鐘でもなく、言うならば、男女ともに、青年、中年層階のきわめて僅少なJ型（鬼の棒）とも言つていい人口構成を特徴としている。

現在M市の人口を昭和五十年をベースに考えると、凡そ今から二十年まえ（昭和三十五年の一・四倍の増ということになる。

因みに、昭和三十五年の人口は凡そ二万九千人であつたが、年々増加の一途をたどり、ついに昭和四十年には三万一千六百人、四十五年には三万八千人、五〇年には四万台にふくれ上つて（四万一千人）きた。

とくにその増加の傾向は総じて市街部（M市Y町）を中心に著しく、純農村部ではその増減が目立っていない。今日我々が調査対象に選んだ二地区Y学区は市街部で多いに人口増を示し、H学区はそう目立っていない。

さらにこれを人口密度で比較してみると前者は三四・三（面積二五二畝、人口八、六四四人）、後者のそれは僅かに四・七〔（面積）一、

一〇〇畝、人口五、一七八人〕という比率になっており市街部と純農村部との対比が著しい相をなしている。次に学区別地域型を参考にとすると、前者の吉身は「市街地急増」のカテゴリーに分けられる。また後者のH地区では「周辺部停滞」となっている地域的特徴をもつ。さらに世帯数をその家族数と比べてみると、Y地区二、三〇〇世帯、平均三・七人、H地区は半分ほどの一、一〇〇世帯、一人増の四・五人という家族構成である。

その内もとても我々に関心のあるのは、六十五歳以上の老人の数である。昭和五十二年のM市社会福祉概況では、Y町六三九人、H五八二人、逆に純農村部に老人の数が、密度大ということになる。

ちなみに、彼らの産業別構成をみるならば、M市平均の場合とHでは、著しくその様相を異にしており、第一次産業に従事する人口が、M二六％に対してHでは、三九・五％、したがって一〇％近く、ちょうどⅠ産業とⅡ産業にたずさわる人口比が逆になっており、したがって第三次産業はどちらにも差がなくMの三四％に対してH三二・

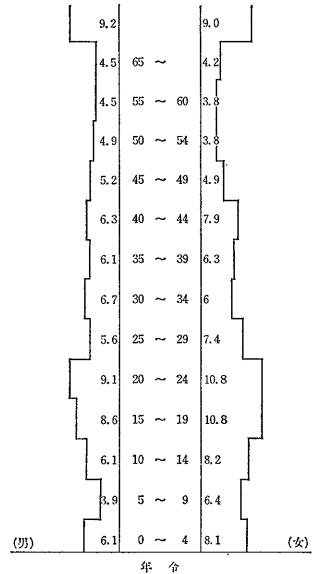


表6 M市の男女別人口構成

八%といった結果になっており、この関係は、急進な変化をみるであらうと考えられる。このうちとくに農家の兼業率割合が急増しており、他方脱農化を著しくしてきている。例えば昭和二十五年で四九・八%が農業を主にしていた農家が昭和四十五年には九六・五%と農家の農幹労働力の他の産業への流出を特徴とするに至った。またその地域性の特徴として、M四三八二軒これを一〇〇とすると、Hはなんと全市の四分の一（二五・一%）一、一〇〇軒を占め、人口の割合は、Mが先きのべたように三四、七八五これを一〇〇と置くと、約一五%（一四・七%）の五、〇四〇人、世帯数ではなんと五分の一にも及ばない一三・七%一〇六〇世帯で、これを支えていることになる。また、これを全農家に対する第二種兼業農家がM全市で二〇九家、これを一〇〇と置くとHは、その一四・九%の三〇一戸、さらに商業一三・二%（一五八戸）製造業一三・二%（一五八戸）となっている。なおH地区の資料が入手できなかったが、M全市の県当りの比率から間接的な理解になるが、耕作面積が対県比別にして、昭和四十五年の調査では四・一%、二六八四・七軒で、米の内実でいえば、昭和四十六年度では九、五三〇t、県の四%に相当する実収を収穫しており、昭和四十七年しらべでの家畜では牛九二tの・五%、豚八六tの〇・八%、〇ニワトリ二六%、漁一七五隻、事業所三・三%の一五三〇戸、商業販売額では、昭和四十五年の調査では一・八%の五四八三（百万）の実績となっている。」

そのうち、とくに老人人口に目を転ずるならば、昭和五十年の昭和五十二年一月一日国勢調査報告からすれば全市九〇、四一六人の九・一七%の三、三五二人を占め、うち年齢階級は六五〜六九、一、二八九人、七〇〜七四、九三〇人、七五〜七九、六七一人、八〇歳以上四六九人、なおこの健康の度合別にみた、県厚生部老人福祉課しらべの昭和五十一年度行政方針と予算の概要（五一年四月）からでは、いわゆる健康老人六五、六四二人、とき

どき臥床するもの二一、四二九人、完全にねたきりの状態のなかでの生活者、いわゆるねたきり老人三、三四人、三・七%また世帯構成からこれを見ると、夫婦のみの世帯八四〇九人、独居四六一一人、その他二七、三九六の割りとなっており、今M市の場合を例にとるならば、ねたきり三九名、独居八〇人となっていた。

なお、M市を全体に理解するのになにほどか役立つものと思うが、多少古い統計資料を一覧表にまとめてみた。今その一覧表からMの場合を抜出してみるが、市制がはじめに述べたように、滋賀県で最後、つまり一番新しい市制誕生の市となるが、人口が大阪の一七万はよいとして、彦根、長浜等々が五万以上を有し、それに次ぐ近江八幡、草津が四万これに次ぐ市として、八日市とM市が継ぐが三万台の人口を有する。その面積に比べ、人口の少ない市ということを物語っている。ところが、その世帯数でいうならば、大津市の四、〇〇〇、彦根二、〇〇〇世帯は一応別としても、他の市ともに一万世帯（八日市を除く）そう大差がない。他方、その一世帯当りの家族数を見ると、全国平均からすれば、著しく多く、大都市部では、四人を割り（三・七・三八人）に対して、近江八幡、八日市、草津、Mの如きは四・一人と平均しており、とくにMの場合は、一世帯平均四・三九人とわが国の戦前並みの家族数を示している。

次いで一人当りの畳数を算出してみるとM市では、七・一畳と一人一部屋を原則としてもっており、次ぎに水道の普及率がその文化の程度を知るバロメーターともなりうるが、これは九一・九%、一人当りの水道の使用料は、昭和四十八年大津、彦根の都心部は除いて、その他の市平均よりも、やや上まわる〇・二四二 $\text{円}$ 。電話は、Mの世帯が七、五四三戸に対して七、一三八世帯と、おおよそ一戸に一台、しかもテレビは二・五人に一台、世界七番目の普及率（昭和五十二年）と報告をうけたが、MとくにO部落ではテレビのない家が皆無なほど、家庭の必需品と

なっている。

さて、他、火災の件数や犯罪の件数だが、（残念ながらことに警察のデータ入手出来ず）昭和四十八年の統計によると、その火災件数では、都心部ほど多発しているが、それでMは僅かに九件を数えたのみ、他は二〇件より一七〇件に至り、圧倒的の事件発生が少くないことを物語っている。とは言うものの、備えあればうれいなしで、消防車の台数がMで九台、ポンプ車八台、市の消防職員二〇人、これに対し他市が人口一〇〇人に対して七・八人が、M四・五人少く、自辺の消防団員、他の市に比べ二七六人と、一〇〇人平均六人が、Mでは一〇〇人に対して八人がこれに組織され、今だ自衛の精神が色こうく残っていることを示したデータであろう。

また、市の生活の様々なニードにこたえる市の職員は（昭和四十八年度の資料）三六四人、これを市の人口に対する割合に換算すると、他市よりも〇・二〜五低く、一・〇四、つまり一〇〇人に一人という割合になっている。また、交通行政の件数をこれもまた昭和四十八年度の統計にすると、二〇八件と他市に比べて圧倒的に少なく、老人にとって社会資源である諸施設の割合をみると、Mでは老人クラブ数八〇、六〇歳以上メンバー三、二五九人、Hでは、クラブ数一〇、メンバー五九五人となっている。なお五一・四の県下における特別養護老人ホームが七ヶ所、定員五四四人のうち収容、五四四、特別老人ホーム、七ヶ所、定員一、二一五人中、二一五人、一〇〇％収容、軽視老人ホーム、一ヶ所、定員五〇に対してこれも一〇〇％満たし、計一二ヶ所、定員八〇九人中、八〇〇人すでに収容、この八〇九人という収容定員数は、〇・八九人となる。その他老人いこいの家がM市石田町に、老人センター（王津）が、各々一ヶ所充当している。さらに子供の場合、保育所が市立五ヶ所、私立二ヶ所、小学校一五ヶ所となっている。なお、なんらかの住民の生活の指標となるものとおもいますが、そのホームヘルパーの数である

が、現在、Mでは一〇人（昭和二十五年一月一日現在）これに対して老人ホームヘルパーは全くなく、一〇人は老人以外のサービスに従事しているとおもう。ちなみに、MとHを比較した表を作ったが、これを参照すると、手帖交付から推定しておおよそ表7のようになる。

市（行政機関並びに行政）

市の行政のモニターはM市役所（Y町）と二つの支所（はやの、なかす）、福祉事務所はM市福祉事務所をはじめ、三つの公民館（中央、北、公民館）、老人いこいの家（石田町）、M市母子健康センター、保育所三ヶ所、幼稚園七ヶ所、小学校六校、中学校一校、女子高一校、県立高一校、滋賀県立成人病センター、消防署一となっている。

さらに行政は市長はじめ、助役、収入役、教育長の四役の下にM市議会、議長以下二四名その他、下部委員会、選挙管理委員、監査委員、公平委員、それに農業委員を置き、市長の下に企画、総務、産業土木、市民の四部門を組織している。今回我々が大いに関係ある担当行政は市民部門民生課福祉課である。

とくに「老人」のそれについては、M石田町にある「老人いこいの家」と老人クラブの拠点となっている市全体五四クラブ、総員三、二〇〇人をかかえる「M市老人クラブ連合会」がある。

表7 守山における障害者手帳交付

	M 市	H学区
視覚障害者	64(人)	17(人)
聴覚障害者	36	4
音声障害者	31	5
肢体障害者	437	86
内障	26	9
総計	599	121 (20.2%)